書かれざる作品

豊島与志雄

横須賀の海岸に陸から橋伝いに繋ぎとめられ、僅かに記念物として保存されている軍艦三笠を、遠くから望見した時、私は、日本海大海戦に勇名を馳せた軍艦のなれのはてに、一種の感懐を禁じ得なかった。そしてその感懐が、ひいて三笠に対する興味となって、「軍艦三笠」と頭する小説を書いてみようと思うようになり、少しばかり記録を調べにかかったことがある。その時私の頭の中には、一個の存在として三笠が映っていた。軍艦という構造物ではなく、生きた一つの個体なのである。先ず、進水式があげられて、彼女は海に浮ぶ。当時他に比肩するもののない美丈夫なのだ。日

本の近海を誇らかに漫歩する。そのうちに日露戦争となり、日本海の海戦には、旗艦として僚艦の先頭に立ち、縦横に駆馳して旗艦を逐い、輝かしい凱旋をする。然るに其後、彼女の生活は次第に衰運に向かい、新式の優秀な軍艦が相次で現われ、彼女は遂に記念物として、ミイラ的な存在を横須賀沖に続けることになる……。そういうことを、じっと考える場合、乗込員などはもう私の頭には映らず、艦長や司令官なども彼女のうちの一微粒子となり、「皇国の興廃……。」の信号も彼女の顔面筋肉の僅なおののきに過ぎなくなり、ただ彼女の姿だけがそこに現われるのだった。或は港の中

にじっと立止り、或は静かな海をそぞろ歩きし、或は暴風雨の中を突進する……。その後ろ姿を見守っていると、彼女の姿は益々小さくなり、海戦においても、指頭大の玩具の舟にすぎず、砲弾は砂粒にすぎない。そして遂には、私は彼女の姿を見失いがちで、茫漠たる海洋だけがはてしもなく広がってるのだった。私はまたあらためて彼女の姿を探し求め、彼女の跡を追うのであるが、ともすると再びその姿を見失いがちで、海洋の永遠な広茫だけが全面に立現われてくる……。そういうわけで、三笠は常に縮小し縮小して、一の微粒子とまでなって私の眼をのがれ、私はそれを捉える

術もなく、遂に「軍艦三笠」は書けなくなってしまったのである。

この「軍艦三笠」と全く逆なことを、私は「錆びた銃弾」で経験した。私が中学時代を過した郷里の、海岸の松林のなかに、昔、射的場があって、聯隊の兵士たちが時折実弾射撃をやった。その射的場の附近の砂の中に、流れ弾が埋ってることがあって、それを掘りだすのが少年の楽しみだった。そうした弾丸の一つを主題にして、「錆びた銃弾」という小説を私は考えてみたのである。射的場の砂中から拾い出された一個の銃弾が主人公なのである。ところがこの主人公は、見つ

むれば見つむるほど、際限もなく拡大されていく。先ず最初には、製鉄所がある。そこに働く数千の労働者、昼夜とも不断に火焔を発してる熔礦炉を中心に、複雑なる製鉄工程。次には、特殊な組織をなす軍需品工場。そして生まれ出た一個の銃弾が、弾薬庫の中に他の同類と共に蓄積され、聯隊に輸送され、兵士に分配され、小銃に装塡され、発射され、三百米を一瞬間に飛んで、砂の中に突入し、そこで錆びていくのである。そしてこの作品では、製鉄所は省略するとしても、軍需品工場は是非必要であるし、なお、軍隊組織を無視するわけにはいかない。かくして、一個の弾丸を見つめる時、

その背後に、或はそれを通して、種々の設備や組織が立現われてき、錯雑紛糾を極めるのであった。云いかえれば、一個の弾丸は際限もなく拡大していって、私の視野の外にまで拡がり、私はその全貌を捉えることが出来ず、「錆びた銃弾」が書けなくなってしまったのである。

ところで、軍艦三笠は限りなく縮小し、錆びた銃弾は限りなく拡大して、どちらも作品にはならなかったのであるが、対象物の縮小と拡大というその正反対な動きは、私に種々のことを考えさせるのである。固よりこの正反対の動きは、見方の相違から来るのではあ

るが、創作という点から云えば、どちらも、焦点が合わなかったことを意味する。

「軍艦三笠」にせよ「錆びた銃弾」にせよ、共に特殊な主題ではあるが、これを一般論化して、象徴的意義に解することも出来る。実際のところ、人間について、その性格や心理や境遇や事件を取扱う場合、時として、見つめてるうちに、その対象物が次第に縮小していって消え失せたり、次第に拡大していって視野から溢れ出たりするのは、屢々経験することである。どこか眼の焦点が合っていないのである。眼の焦点が対象物にぴたりと合って、見つめることはただ対象物を明確な

らしめるだけに過ぎないという、そうした場合こそ理想的であろう。然しこの理想的な場合は甚だ少なく、ともすると、見つめてるうちに対象物が延びたり縮んだりする。その延び縮みが甚しくなって、前述のような場合には、作品は書かれずに終る。そしてこの「書かれざる作品」は、吾々に種々のことを暗示し示唆してくれ、吾々を深く考えこませるのである。時としては、書かれたる作品よりも、書かれざる作品の方が、より多くのことを吾々に教えてくれる。

底本：「豊島与志雄著作集　第六巻（随筆・評論・他）」未来社
　　　１９６７（昭和42）年11月10日第1刷発行
入力：tatsuki
校正：門田裕志
２００６年４月24日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。